



インドネシアのバリ島には、バリ・ヒンドゥー教による独特の世界観がある。この世には「神」と「悪霊」がいて、人間はその間の世界で調和をとりながら生きていく。村人は日々、神と悪霊の両方にお供えを捧げる。

村人たちは年中祭りで忙しい。一年が210日の「ウク暦」により、家、村、周辺地域それぞれにある寺の創立記念日が次々にやってくるからだ。島には「サカ暦」という別の暦もあり、こちらは月の動きによる陰暦となる。そのサカ暦によると今年最大の行事が、西暦では3月5日に当たる正月「ニュピ」だ。

大晦日が近づく、各村には「オゴオゴ」と呼ばれる恐ろしい妖怪の張りぼてがいくつも作られて並ぶ。大晦日になると青年たちがその妖怪を担ぎ、村境の三辻みつじで「オゴオゴ！」と大声で叫び、暴れ回る。地中に潜む悪霊を妖怪オゴオゴの力で地上に叩き出すのだ。地上に現れた悪霊は、翌日の元旦に村の上空を通り、海のかなたへと去って行くと信じられている。村人たちは窓を閉め、家の中に閉じこもり、電気を使わず決して音も立てず、ひっそりと悪霊が通り過ぎるのを待つ。

ガイドブックに「ニュピの日は空港や店がすべて休みになるので注意」と書いてあるが、実はこの正月が村人にとって一年で最も恐ろしい日なのだ。

春 夏
秋 冬

30

3月 バリ島の正月

妖怪オゴオゴで 悪霊退治



インドネシア
INDONESIA